



「緑の大地計画」と山田堰

2002年、中村医師は、干ばつで荒れ果てた農村の復興のため「緑の大地計画」を立案。2003年、マルワリード灌漑水路建設を開始します。取水堰の築造にあたり、全国各地の堰を訪れ「山田堰」にたどり着いた中村医師。洪水にも耐えた石積み自然堰に注目し「電力が利用できず、土木資機材の搬入が困難で、単純機械による建設、地元住民による維持管理を考えたとき、これに優るものはない」と山田堰をモデルとすることを決意しました。

第二の山田堰完成

「山田堰」は、水流に対して川底に石を斜めに敷き詰めた、現存する全国唯一の「傾斜堰床式石張堰」。江戸時代に古賀百工が考案し、約64万人の先人たちの手で築造されました。中村医師は、何度も山田堰を視察。山田堰土地改良区や関係機関のサポートを受けてその工法を研究し、川岸で堰を一日中見つけていることもありました。



2010年、7年の歳月をかけて全長25・5キロのマルワリード用水路が開通。アフガニスタンに山田堰モデルの取水堰が完成しました。その後、改良・改修を繰り返し、2019年には、山田堰の機能を徹底的に模倣したカマ第1・II堰が完成。現在では、堰幅が550メートルのものなど9カ所の堰が設けられ、65万人が帰農することができました。

山田堰を世界に発信

山田堰を視察した際に「世界に誇れる山田堰をもっと国内外に発信すべき」と、当時の山田堰土地改良区事務局長徳永哲也さんに語った中村医師。マルワリード用水路の完成とともに、中村医師が国内外で広く山田堰を紹介したこともあり、山田堰は2014年に世界かんがい施設遺産に登録されました。

追悼 中村 哲 医師

朝倉とアフガニスタンとの懸け橋 ～緑の大地計画への思いと山田堰～

山田堰をモデルにした取水堰で 荒野を農地へ変えた中村哲医師

日本から直線距離で西に約6300キロに位置するアフガニスタン。日本の約1.7倍の大地は、戦乱や干ばつで荒れ果て、砂漠が広がっていました。

中村医師は、1984年にパキスタンのペシャワールに赴任。その後、アフガニスタンで医療活動を開始し、水不足による赤痢やコレラが急増したため、飲料用井戸約1600カ所の掘削など水利事業にも着手。さらに、2010年には、山田堰をモデルとした取水堰を築造し、現在では1万6500ヘクタールの荒野を農地に変え、アフガニスタンの人々に希望を与えました。

また、中村医師は日本のみならず、世界各地で「山田堰」について発信し、堰の保全や知名度アップに貢献されました。

今回は、昨年亡くなられた中村医師の功績をたどり、朝倉とアフガニスタンのつながりにスポットを当てます。



▲視察団へ説明する徳永哲也さん（右から3人目）
【平成30年7月】

中村医師が朝倉とアフガニスタンに懸けた橋は、今後も後世に引き継がれ、多くの人々に希望を与え続けます。

《写真提供・協力》
・ペシャワール会
・山田堰土地改良区

朝倉とアフガニスタンとの懸け橋 中村哲医師を偲ぶ会 ～緑の大地計画への思いと山田堰～

日時 **2月24日**（月・休）9時30分～

場所 **朝倉地域生涯学習センター 文化ホール**
（宮野1997）

中村医師の活動を長年現地で取材してきた谷津賢二さん（日本電波ニュース）の講演も行われます（内容などは変更となる場合があります）。

問 **山田堰土地改良区**（☎52-0531）
市農林課（☎52-1115）



中央図書館では追悼上映会を開催します。
※詳しくは、21ページをご覧ください。